

県民の意識・ニーズ

この先30年間で起こる技術革新やライフスタイルの変化は、これまで都市部に集まっていた仕事や教育の概念を根本から見直すことになり、丹波地域のような中山間地域を劇的に変える可能性がある

丹波地域は集落自治がしっかりと機能しているが、村入りや日役、出不足が負担となっている。高齢者は日役でも労働力になりにくく、自治会活動が若い世代にとって負担に感じてしまうものになっている。自治会等の役員は会議等でファシリテートをするが、それも簡単なことではない。責任はかかるが対価がない、という自治会の在り方では、今後成り立っていかないところも出てくる。

丹波地域は田舎暮らしの再発見（スローライフ）に相応しい。効率重視でなく手作りなどで自然や文化に価値を感じながらの暮らしができる場所である。一方、丹波地域へのアクセスが向上すれば、丹波の田舎らしさがなくなることも考えられる。

自治体の財政も裕福とは言えず、職員数も減っている。そのような、役所の支援や公的サービスだけに頼ってられない時代の中で、地域での支えあいが必要になってくる。共助・公助は従来のスタイルのままでは破綻し、小集落では、寺社の維持など個人に大きな負担のかかるものは、その維持をあきらめざるをえない状況が予想される。

●教育、学び**30年後の目指すべき姿**

- ・地域のあり方を自分ごととして考えられるような学校教育ができる地域
- ・子どもたちが「丹波は帰りたくなるようなふるさとだ」という意識を持てる地域
- ・山間部のICT教育の先進地域
- ・都会の人に、丹波の良さを学んでもらえる環境がある地域
- ・誰もが自ら学び、自ら意志決定して、その夢を実現できる地域（応援体制含む）
- ・何度も挑戦でき、失敗してもやり直せる地域

提案

- ・地元の高校に、地域のことやここにしかないことが学べる学科を設置
- ・田舎で一生暮らしていけるキャリア設計を学ぶ、田舎暮らしキャリア高校の設置
- ・GIGAスクール構想の実現環境をいち早く整備
- ・夏休みなどの長期休暇を利用し、空き家の活用などで都会の子やその家族を受け入れる短期の農村留学を実施する
- ・丹波地域に居ながら、全国の大学などにつながって教育を受けられる

●情報社会、テクノロジー**30年後の目指すべき姿**

- ・丹波地域の魅力をしっかり発信し、伝えることができる地域
- ・情報格差がなく、情報漏洩などのリスクが管理されている地域
- ・自動運転や遠隔診療、オンライン授業のモデル地域
- ・テクノロジーの活用により、丹波地域の魅力を高められる地域
- ・丹波地域に居ながら、教育、仕事、商売、旅行体験などができる地域

提案

- ・オンライン診療の受診方法など、技術的な部分を学べる仕組みが必要
- ・地域内や都会と地方との格差を生まれにくくする
- ・誰もが情報をうまく扱うことができる
- ・あらゆる情報がデータとして共有され、誰もが自由に閲覧・活用することができる
- ・ITで付加価値をつける仕組みを考案できる人を教育する
- ・テクノロジー、IT、ロボットが担い手不足を補い、人にしかできない温かみや豊かなコミュニティがより強調される。

丹波の柱その1（仮称） <現行ビジョン区分：自立>

●地域自治

30年後の目指すべき姿

- ・緩やかで持続可能な自治会、気安い地域コミュニティの地域
- ・個を重視しながら、個を補う地域
- ・子どもからお年寄りまで、みんなが参画して地域づくりを楽しむ地域

提案

- ・自治会が負担になるだけでなく、参加したくなる仕組みがある
- ・自治会等でプロのまとめ役を雇用する

●まちづくり

30年後の目指すべき姿

- ・「丹波の森」を活かした「丹波らしさ」「丹波のカラー」のある地域
- ・丹波の良さである田舎の部分、田園風景を残しつつ、生活するのに便利なまち
- ・~~経済も生活も、丹波で循環する社会~~→●循環型社会 に移動
- ・住民視点の、相手の立場に立って考えたまちづくり

提案

- ・丹波はアナログで「直に触れあえる場」としていく
- ・誘客手段として、また観光振興のためにも道路整備が必要
- ・旧町の強みを伸ばすようなエリアマネジメントや、特区的な事業を進める
- ・一律でなく何かを磨く
- ・広い土地を利用し、アスリート教育や大きな音を出す音楽家の育成に力を入れる

●ソーシャルビジネス（新規）

30年後の目指すべき姿

- ・課題先進地の農村で、多様な社会課題の解決を目指した仕事（ソーシャルビジネス）があふれる社会
- ・社会課題の解決を仕事にするチャレンジを後押しできる社会

※個人の自立は理解されやすいが、まちや地域の自立は、必要性も含めて認識されにくい。なぜ、地域が自立しないといけないのか？自立した地域とは何なのか？だれのための自立なのか？自立した地域の良さ、すばらしさを明確にしないとマジックワードと化するのではないか

県民の意識・ニーズ

少子高齢化社会で子どもの人数が大幅に減少している。子どもは地域の宝として地域で育てていく必要がある。女性の社会進出が望まれる中、それを支えるための子育て支援は、三世同居の率が高い田舎が良いと考えられる一方で、多くの負担を母親が担っている印象があり、る。今でも男性が台所に立つべきではないという考えがあるなど、田舎ならではの昔ながらの古い慣習にとらわれた子育てのしづらさもある。

今までなかった感染症の発生や気候の変動など社会の関心も変化している。さらに、災害や感染症など、都市が抱えるリスクを避けるため、中山間地域の存在意義や重要性はますます高くなる。

●子育て

30年後の目指すべき姿

- ・ママが安心して子育てでき、子どもも住みやすい、あつたかい丹波地域
- ・→子育ては「ママ（女性）が」担うものという意識ではなく、「若い世代が」「誰もが」などのほうがよいのではないか
- ・田舎の自然の良さ残し自然と共生しつつ、都会のような選択肢と情報の速さを享受できる地域
- ・地域全体で子どもを育てられる環境が整っている地域
- ・保護者が、安心して楽しんで子育てができる環境が整っている地域

提案

- ・男性が男女ともに育児に参加できるよう、地域・社会の子育てに対する理解を深める必要がある
- ・子どもが泣いても気にしなくていいような、憩いの場所・安心できる場所をつくる
- ・子どもたちが自由に過ごすためには、大人も自由に過ごせる環境が必要
- ・子育てや妊娠・出産を当たり前のことと考えられるよう、子どもたちに伝える教育
- ・地域、施設、人との連携が必要
- ・つながりを感じられるコミュニティが必要
- ・自然環境とともに生活する価値を子どもたちに伝える教育
- ・保育施設の拡充や産婦人科・小児科などの医療体制の整備

●循環型社会 →持続可能な地域（人や集落の再生産）の視点も必要？

30年後の目指すべき姿

- ・バイオマス発電や自然エネルギーで生活できる地域
- ・有機肥料で農業ができる地域
- ・通貨がなくても暮らせる地域
- ・経済も生活も丹波地域で循環する地域

提案

- ・田畑が太陽光発電パネルになっている。
- ・昔は灰屋でつくった焼土を肥料としていたる
- ・物々交換で暮らしが成り立つ
- ・フードロスをなくす
- ・丹波地域の特徴である森林資源の豊富さを生かして、それらを有効活用し、丹波の経済活性化の原動力に

丹波の柱その2（仮称） <次代>

●限界集落

30年後の目指すべき姿

- ・原風景の残る豊かな暮らしができる地域
- ・これまでにない新しいコミュニティが形成される地域
- ・新たなビジネスモデルの創出が支援され、限界集落を脱する機会がある地域

提案

- ・丹波地域版ニューディール政策により、市が主体となり宇宙開発などさまざまな開発に乗り出す
- ・人口減で廃村となった村を、「漫画家村」「魚好き村」など新たなコミュニティへとリノベーション
- ・人家の多い地域から遠く離れた立地を生かし、畜産公害(においやハエなど)の対策を取れる立地として活用。その際、観光農園化、レストランの併設、六次産業化を図るなど、新しいビジネスモデルの創出を支援

●ライフスタイル

30年後の目指すべき姿

- ・新しい時代・新しい価値観の中で、丹波地域らしい生き方や暮らし方ができる地域
- ・多面的なとらえ方や受け止め方で、マイナスをプラスに変えることができる地域

提案

- ・丹波地域特有の文化を小学生のうちから職業体験してもらう
- ・社会にしばられない自由な生活ができる
- ・2拠点生活、ワーケーションなど組み合わせて、心豊かに人生を送る
- ・自然環境の中で汗を流して、「モノ」をつくることが、希少価値になる

●次代への意識づくり

30年後の目指すべき姿

- ・学校での早い時期から、子供が大人とともに次代について考える場がある地域

提案

- ・世界、日本の先駆例や取り組み方法を知識として与え続ける
- ・次代に対する、丹波の自然の在り方を話し続ける

※「SDGs」に関する簡単な記述を、第2章 私たちを取り巻く変化【大潮流】などで記述する必要がある。

今後の兵庫県は勿論、丹波地域においても、カーボンニュートラルや男女共同参画の着実な進展等は、行政課題の重要な要素として取り組まれるだろうし、新ビジョン構想においても記述されるべき考え方であると思われる。

県民の意識・ニーズ

丹波地域は、アパート需要が高く新築も進むが、それでも足りていないのが現状。年配の人も大きな家を手放して、便利なところに移り住む状況がある。空き家は年々増加しているが、持ち主が分からないことも多くリノベーションが進まない。空き家の活用や、行政の支援には限界が見えている。

移住者は、住む場所を選ぶ基準は「どこ」ではなく「誰と」が重要になる。村入り費用や日役など移住者を悩ませる問題もある。また、移住者の中で、自分で地域を動かしていく“プレーヤー”が増加している。その人がまた別の“プレーヤー”を呼ぶ流れができてきた。

森は荒れて獣害が増え、川の水がすぐにごる。山の涵養性が低く、雨の後、山から川に流れ出るのが早くなっている。山の所有者が変わり、山に感心がない人が増えている。

●移住**30年後の目指すべき姿**

- ・ 何度も来てもらえる地域となり、交流人口が多い地域
- ・ 移住者が暮らしやすいような受け入れ体制が充実し、定住してもらえる地域
- ・ 往来をする先ではなく軸足を置く拠点として、丹波から他の地域へ「何度も出かけて行く地域」

提案

- ・ IT人材など、ターゲットを決めて3～5年間安く住める住宅をつくる
- ・ 車のリース等、移動手段をサポート
- ・ 農業をしにくるなど、週末だけ丹波へ来てもらうよう、2地域居住をPR
- ・ 若い人に丹波の良さを発信する
- ・ 一旦丹波を出て戻ってきた人に丹波の良さを聞いて、発信する
- ・ 丹波を別荘地として活用してもらう
- ・ 都会にはない村入り費用があるので、移住の際トラブルになる
- ・ 神戸大学の実習では毎年50人くらいが丹波篠山に来て、関わりを持つ中で地域のよさに気づき、毎年一人くらいは移住している。関係人口を増やすきっかけとなる
- ・ 兵庫県の中部に位置することや本州西部への入り口として地の利を生かした、「移住者が暮らしやすい地域」になる

●空き家問題**30年後の目指すべき姿**

- ・ 空き家ネットワークがある地域
- ・ 空き家の多様で価値のある利活用が進んでいる
- ・ 空き家になる前に、「今住む家の快適性を高め、子や孫が帰ってきやすい家」を創る仕組みがある

提案

- ・ 行政と連携し、空き家の情報を管理、把握する
- ・ 空き家に1ヶ月くらいの短期滞在ができるシステムをつくる
- ・ 空き家をリフォームして避難所にする
- ・ 空き家をシェアハウスのようにリフォームし、田舎の暮らしを堪能しながら地元の人と交流のできる場に
- ・ 農業がしたい移住者へ仲介できる仕組みがある
- ・ 持ち主不明の空き家がなく、空き家に何かあればすぐ連絡がとれる体制がある
- ・ 所有者によって適正管理がなされず、荒廃し地域のお荷物になる建物をどうしていくか、の視点が重要

丹波の柱その3（仮称） <現行ビジョン区分：交流>

- ・30年後よりももっと早い段階でハード資産は取捨選択が迫られることになる可能性を見据えるべき
- ・受け入れ側のソフト面での体制整備が必要
- ・「残すべき家」「整理する家」を明確に分類、用途を「居住」「事業」「資産運用」と整理し、価値のある活用につなげる
- ・空き家になる前に、段差の解消や水回りの利便性向上など、高齢者にとっても空き家を継承する人にとってもメリットになるようなリフォームを考えられる仕組みがある

●自然、環境

30年後の目指すべき姿

- ・山も土も水も循環する中で、森の中の暮らしができる地域
- ・森への正しい知識の普及が進む地域

提案

- ・丹波地域の売りである四季折々の環境、豊かな森、里山、源流を残す努力をする
- ・昔、丹波篠山地域にたくさんあった灰屋の活用を見直す
- ・山に対する意識を改革する（山は放置していれば荒れてしまい、適期の除伐、間伐が必要）
- ・AIに自然環境の管理を早くから委ね、丹波地域を先進的なモデル地域にする
- ・自然と触れあうことを教育カリキュラムに組み込み、自然について考える力を育む
- ・山が人を呼ぶ地域になっている
- ・バイオマス発電が地域全体で熱心に取り組まれている
- ・資源のよさや環境のよさが30年後も変わらず残っている
- ・山に入る人が増え、山が誰でも入りやすいものになっている

●関係人口

30年後の目指すべき姿

- ・地域への愛着や関係性を深めながら地域の課題解決や活性化に貢献する人口＝関係人口が活躍する地域
- ・さまざまな人材が社会課題解決・地域活性化に挑戦できる地域
- ・地縁＋テーマで新しいコミュニティが生まれる地域
- ・多様な人材がまちをよくする「プロセス」に関われる地域

提案

- ・「観光・交流以上、移住・定住未満」でさまざまな関わりができる環境づくり
- ・関係人口が活躍できるまちにしていくことは、地域にとっても都市部人材にとっても需要があり、京阪神から通いやすい丹波地域の立地を活かせる
- ・関係人口は、観光・交流と移住・定住をつなぐ存在としても重要。特定の地域への関係性を深めて、多様な活躍ができる環境を整えていくことが大切

県民の意識・ニーズ

農業の分野では、就農者が減少。高齢者が多い地域では、地域の8割の農地を世話する人がいる。鳥獣害被害も多く、対策に労力がかかる。丹波栗は価値が高いが生産者が高齢化しており、放棄地になっているところもある。

林業の分野では、木材の価格が下落し、山の保有を負担と感じる人が増え、関心をもつ人が減っている。用材としての利用が減り、バイオマス燃料やパルプ材料になることが増えている。間伐期が遅延し、山が荒廃している。

枝豆のもぎ取り体験や農家民宿利用者も増え、ただの観光からツーリズム指向へと価値観も変わってきている。コロナ禍においても、丹波の農産物の直売所には都会からたくさんの方が来た。

● 農業**30年後の目指すべき姿**

- ・農家のネットワークができ、先進的な農業の普及・発展のための環境が整備されている地域
- ・農作業や簡単な大工仕事ができる、かつこいいおっちゃんやお百姓さんがいる地域
- ・耕作放棄地がない地域
- ・高齢者や女性が活躍できる場が広がっている地域
- ・移住就農者や定年退職者のスムーズな就農が進む地域
- ・丹波ブランドの品質が保証され、それを活かした儲かる農業、経営的に自立できる農業が実現できる地域
- ・中・小規模農家の支援による「農業のある豊かな暮らし」が実現できる地域
- ・世界とつながる小さな農業が実現できる地域

提案

- ・丹波は兼業農家が多いので、それを丹波、兵庫の特色として支援
- ・新規就農者が生産できて生活できるように、機械のレンタルや助成などで支援
- ・丹波地域全体の農地の土壌環境をAIで高め、最高の土壌を持つ地域としてPR
- ・若い人が農業に取り組めるような、儲かる農業の仕組みづくりを検討
- ・スマート農業の拡大など、取り組みやすい農業、儲かる農業が求められる
- ・刈り草を生かした循環型の農業が進んでいる
- ・他の地域より有機農家、新規就農者が多いという特色を生かすため、柔軟な話し合いの場を設け、より取り組みやすい環境をつくる
- ・品質基準やトレーサビリティまではいかないまでも、適切な情報発信によって丹波ブランドの農産物がちゃんと売れる仕組みが必要
- ・スマート農業は、農地集積や資金の面といった、丹波の地形を頭に入れたうえで導入する
- ・鳥獣が生きるための餌が山にきちんとある環境をつくり、農業と、鳥獣のすみかをすみわける。
- ・耕作放棄地を別の用途で活用したり、山林とみなすなど、根本的な対応が必要

● 林業**30年後の目指すべき姿**

- ・山の畑化が進み、スマート林業が普及している地域

提案

- ・丹波材を使ったCLT建築が普及し、官庁が高層木造庁舎等の建築をしてPR
- ・丹波産の良い檜材を、地元で活用
- ・林業の昔からの技術が継承されるシステムができている
- ・仮想シミュレーションを使い、よりよい山の環境を作る重要性を教育する
- ・建材とチップと山をデータ化して稼げることが示されている

● 商業、労働

30年後の目指すべき姿

- ・ 落ち着いて仕事のできる環境や、おしゃれな働き場が充実する地域
- ・ 個性豊かな仕事ができる地域
- ・ 丹波の地場産業に従事する人が増え、暮らしに息づいている地域
- ・ 地域の環境を守るものづくりができる企業育成・企業誘致が進む地域

提案

- ・ 豊かな自然の中で仕事に集中できる環境が整ったオフィスをつくる
- ・ セルフオフィスに特化したエリアとして、丹波地域を売り出す
- ・ スマートオフィスやサテライトオフィス、アーティストなど、個人での仕事を誘致
- ・ 地域としては、地元の個人商店が必要
- ・ 移住と掛け合わせて「交流人口」を労働力と捉えて、地域の担い手になってもらう
- ・ 起業の限界や一般市民の暮らしを見据えた観点で、雇用を考えることが必要
- ・ 生産性が高い産業や事業については、環境整備で更なる事業者を呼び込む
- ・ 丹波地域内での雇用の所得向上までを視野に入れる必要がある
- ・ 空き家リノベーションのできる工務店、スマートオフィスやサテライトオフィスのデザインができるデザイナーなどを育成・誘致する
- ・ 大学を卒業したら、丹波に戻って学びを生かして仕事ができる環境が必要
- ・ 雇用を生み出す、地域独特の事業所が必要。支援して成長させる

● 観光・ツーリズム、第6次産業

30年後の目指すべき姿

- ・ 丹波ブランドの構築と、それを目指して来る観光客の誘致がすすむ地域
- ・ 丹波ブランドが広く認知され、一定の供給量とその生産体制が整っている地域

提案

- ・ 「水分かれ」を「決断」のスポット・聖地にし、そこへ行くまでの道を「決断の道」としてPRする
- ・ 「観光」と「住」を棲み分けるか、反対に観光の中に生活があるのも貴重
- ・ 丹波地域の強みは恐竜や紅葉だが、スポット的にしかお金が落ちず、地域全体に波及させる必要がある
- ・ 特産品がありすぎてスターになるものがない
- ・ 年中売りにすることが可能なスター商品をつくる
- ・ 現在あるものを継いでいける体制づくりが必要。季節ものではなく年中ものの加工を進める
- ・ 変化がない産業構造を伸ばすよりも、新しい産業を伸ばす方が現実的
- ・ インバウンドを視野に入れて、古民家を活用した高単価のホテル事業を展開する
- ・ 地域内の産品を使い、高単価な料理を提供できるシェフを呼び込み、レストランをつくる
- ・ ツーリズムにおける「丹波ブランド」を構成するもの・サービスをはっきりとさせ、ブランドが求める水準をみんなで目指せるようにする

県民の意識・ニーズ →悪い面ばかりの記述。またニーズになっていない。ほかの柱でも同様

丹波地域は超高齢化が進み、病院に通うために転居せざるを得ない人がいる。地域の福祉団体などは加入者が減少。役員のなり手もなく、休会や解散が進んでいる。今後、地域の大半が高齢者となる中、公的サービスの充実と取りこぼしのない情報提供が必要ではないか。

大学がなく若者が集う場所や働く場もないため、大学進学とともに若者が離れていく。

郊外から市内中心地への引っ越しが増え、人口は減っているが戸数は増加するなど、三世帯同居の家庭が減っている。

若い世帯が多忙で、三世代交流の機会も減少している。人と人のつながりは希薄化し、人と関わるのが面倒という人もいる。丹波地域は人が優しく、気さくで人間味があり、住みやすいという人がある反面、地域が密で良くも悪くもなんでも噂になり、皆同じようにしないといけないという面もある。

丹波地域固有の価値や文化を残すためには伝承する人が必要だが、誰がその役を担うのか。地域は現状でも自治会組織などで手一杯の中、労力を割き、何を残し何を变えるのかが問われる。

●高齢化、高齢者

30年後の目指すべき姿

・皆が地域を支え、地域全体でお年寄りを助けることができる地域

→高齢者は助けが必要という意識そのものが問題。高齢者も他の住民もそれぞれができることで地域の一員として役割を担うという姿勢であるべき

・高齢者の経験、技能が継承できる地域

・高齢者(女性、子ども、障害者)も居場所や生きがいがあり、活躍している地域

・高齢者(女性、子ども、障害者)がいつまでも暮らせる地域

提案

・公共交通の不便さを解消するサービスの提供

・高齢者の移手段や買い物弱者を支えるための地域の支え合い

・モノの配達を地域全体で管理し、たすけあい配達を

・高齢者のデジタルリテラシーの習得が必要不可欠

・文化を形にして継承していくプロセスをデータ化して収集し、地域に残る文化を後生に伝える

・高齢者も楽しめるeスポーツを普及

・ネットショッピングやデジタル機器等、その使い方に関する丁寧な講習会が繰り返し実施されている

・高齢者の交通手段となる7人乗り程度のバンが、地域内にいつでも巡回している

●多世代、家族

30年後の目指すべき姿

・お互いがお互いを尊重し、多世代が交流できる地域

・経験、技術、文化が伝承・創造される地域

・若い人が、無理をせずに自然と帰りたいと思える意思決定ができる地域

提案

・多世代複合の福祉施設ができ、デイケアで託児し、ママたちも働く場となり、学童保育もできる場をつくる

・丹波から外の地域に出て行くことを解消する

・家庭が変わる必要があり、慣習を重視しない家庭教育も重要

・子どもとおじいちゃんおばあちゃんが交流し、昔と今の違いを語りあう場を設ける

・将来の子どもたちが変わるためには親世代が変わらないといけない

丹波の柱その5（仮称） <現行ビジョン区分：絆>

● つながり、個人の尊重

30年後の目指すべき姿

- ・人づきあいしやすく暮らしやすい地域
- ・誰もが自分らしく生きられる地域
- ・多種多様な住民一人一人が、何らかの居場所(コミュニティ)を複数持って、時々活躍し、助け合う地域
- ・お互いの「個」の存在を尊重しながら、「共」の大切さの認識も根付いている地域（個人主義とムラ型の共存）
- ・自らが意思決定し、その決定したことが実現できるように支えあえる地域

- ・若い人の地域内の交流もが活発な地域に
- ・ひきこもりや発達障がい(愛着障がい)の人が暮らしやすい地域に
- ・自己理解、他者理解が進み、個性が生きる、他者を尊重しあえる地域に

提案から移動

提案

- ・昔のような、意識しなくてもできた人づきあいができる地域に
→慣習や行事があったからこそできていたもの。文化と環境の変化を踏まえ、新たな道を探すべき。
- ・趣味に没頭している人だけを集めた「趣味人特区」をつくり、丹波地域をPRする
- ・バーチャルコミュニケーションが栄える中、あえて人と人の交流を大事にする
- ・他人事や特別なことという認識を皆がすることなく、個人が自分事として主体的に取り組む姿勢が重要
- ・学校教育の場などで、早い時期から継続して個人の意識づくりにとりくむ

● 地域の生活文化

30年後の目指すべき姿

- ・「帰りたくなるふるさと」の意識が醸成した地域
- ・丹波地域固有の価値や文化が残る地域
- ・住民が、愛着や誇りをもって暮らしている地域
- ・丹波地域を都会の人にも知ってもらえている地域 →提案から移動

提案

- ・人口が減少しても都会・田舎合同まつりを実施するなど継続する努力が必要
- ・地元に戻って神輿を担ぎたいと思うような、地域のまつりの仕組みをつくる
- ・先進的な技術もを活用し、丹波地域の歴史文化を保護・継承していく
- ・AIに職人の技術を継承させ、いつまでの地域の目玉として人を呼び寄せる

県民の意識・ニーズ

丹波は活断層もなく災害が少ない地域であるが、平成26年には大規模な水害があった。山が荒廃したままで、大雨が来ると再び大災害が発生する可能性がある。さらに、過疎化や高齢化で避難誘導の遅れなどが懸念される。

学校給食は業者委託され、どこの食材を使っているか分からない。高校では農薬を使った農法が指導されている。ファストフードやコンビニエンスストアの普及もあり気軽に食せる時代だからこそ、安全な食が求められている。

丹波地域はブラジルやベトナム、中国からの労働者が増えている。日本語ができない人や文化の違いから不便を感じている。バリアフリーの普及が遅れており、体の不自由な人や高齢者も生活に不便を感じている人が多い。

昔からの慣習が根強く、女性が暮らしやすい地域とはいえない。

●災害、防災**30年後の目指すべき姿**

- ・災害を経験したり復興に携わった人からの知識・教訓などが、継承されている地域
- ・災害時に地域で助け合いができるコミュニティが形成されている地域
- ・災害や感染症など、社会をパンデミックに陥れるような危機に対して、迅速・的確に対応できる地域
- ・災害時でも、個々の尊厳が守られるような環境が整っている地域
- ・ハード面が充実し災害リスクが少なく、災害に負けない地域

提案

- ・災害復興工事を完了する時は、積み残しがないかなど、検証を重ねる
- ・復興まちづくりにおいて、同じ被害にあわないよう将来を見据えたものに
- ・災害の復興は原形復旧でなく、改良復旧ができるように
- ・常設仮設住宅を設置し、災害に強い地域としてPR
- ・災害体験学習ができるテーマパーク兼、非常時にシェルターとなる施設をつくる
- ・公的サービスだけに頼るだけではなく、積極的な自助や共助も進める
→まずは公助をしっかりと確立させる、という視点の提案も必要
- ・土砂崩れの危険箇所等、古老が語り継いできたことを、若い世代が後生に語り継いでいくことが大事
- ・良質な間仕切りによるプライバシーの確保、女性や社会的弱者への配慮など、避難所でも個々の尊厳が守られる環境が必要

●安全な食 →「農」全体で捉え、その中で見るべき内容。別の柱での議論では？**30年後の目指すべき姿**

- ・食に対する見方が見直され、丹波の味覚が充実するしている
- ・消費者にとって、安全で安心できる食材が提供される産地になっている
- ・地元住民が、安全な食材を安心して食べられる環境が整っている地域

提案 →正しい情報・調査をもとに記載する必要あり

- ・給食で地元食材を使って欲しい
- ・高校で有機農法を指導
- ・毎月、季節の野菜がベーシックベジタブルとして支給されると、農家にとっては安定的な収入源になる
- ・有機野菜を食することで、丹波地域の人は健康になる
- ・生産者、消費者、食育、流通、販売施設、地産地消といった環境を整える

●ユニバーサル（外国人）

30年後の目指すべき姿

- ・年齢や性別、国籍などの特性で不利を被らないユニバーサルな社会地域
- ・地域に住む外国人を含む多様な人材が、多文化共生やダイバーシティ社会を担う地域

提案

- ・地域のイベントなどで、誰もが参加して交流しやすい体制づくりや、外国人も企画段階から参加できる仕組み、外国人自身も主人公となれる仕組みをつくる
- ・積極的に海外に向けて人口を流出させることで、関係人口を増やしていく
- ・丹波地域の外国人が、身近なところで「学び」ができる場所をつくる
- ・気軽に日本語や日本の生活・文化を学べる環境
- ・自治会単位程度の小さい単位での、外国人への支援体制

●男女共同参画

30年後の目指すべき姿

- ・男女に関わりなく、自分が活躍したい分野において自分の能力を発揮できる地域
- ・性に関わらず、強みを生かした仕事で地域貢献できるような、心の自由がある地域
- ・女性も社会の指導的地位につき、丹波地域活性化の原動力になっている

提案

- ・自治会の役員など女性の積極的な登用を
- ・女性が意見を言いやすい元気なまちづくりを
- ・父親の育児参画が必要。残業をなくす声かけなど、企業も積極的に取り組む
- ・男が台所に立つなと言う親をなくす
→ことば自体をふさいでも解決・前進しない
- ・LGBTQIAなどの認知を進みめ、誰もが生きやすい社会に
- ・地域を挙げて、男性側の意識改革、及び女性の活躍を支援・育成する組織だった活動を行う
- ・起業・創業という行動で、自身の価値を高め、必要とされている幸せを感じられる

●弱者とされる対象者（生活困窮者、障害者など）へのサポートの記述が必要